

## 優秀賞

私の言葉の原点「ゆきだるま」

荒川区立第七中学校三年

川上 朋花

拝啓

朝夕は肌寒さを感じる季節となりました。

柳田先生いかがお過ごしでしょうか。

先日、部屋のかたづけをしていたら「ゆきだるま」という絵本を見つけました。この絵本は、たくさんの思い出がつまっている大切なものなので、す。

小さいころ、私は字を読んだり、言葉を話したりするのが苦手でした。そんな私のために母が買ってきてくれたのが文字のない絵本の「ゆきだるま」です。この絵本は、雪の降る日に雪だるまを

作ったら冬突然動きだして雪だるまと雪だるまを作った男の子と一緒に夜の街を冒険するというストーリーが絵だけでかかれていて、文字の読めない私にとってうってつけの絵本だったので。私は今まで絵本を自分から読んだことがなかったのに、この本はいつも自分から読んでいたそうです。また、この本は文字がないので自分でセリフをつけて読んでいたそうです。

この本との出会いがきっかけで次々と文字のある絵本を積極的に読むようになったそうです。また、不思議に思ったことや分からない言葉があったら周りの人に聞きにいたり絵本の中にでてくる物が何かを理解しようとしたりしたそうです。

私になぜ「ゆきだるま」という絵本が印象深いかというと、ただ初めて自分から読んだからとい

う訳ではなく、この本が私の言葉の原点ではないかと思つたからです。この本を読んだときは言葉をお話するのが楽しく、もっと話したいと思ひ話している内にたくさんの言葉を覚えたと思ひます。

たつた一冊の本が世界を上げてくれてやっぱり本つてすばらしいなと思ひました。

敬具

平成三十年九月十七日

第七中学校 三年三組 川上 朋花

柳田邦男先生へ

〈柳田邦男先生からのメッセージ〉

中学生になると、絵本は言葉の発達してない幼い子のためのものだと思ひこんで、絵を読まな

くなつてしまふ人が多くなります。絵本なんか読んでいたら恥ずかしいと思ふ人も少なくありません。

しかし、それは誤つた考え方です。絵本は、年齢が高くなるにつれて、その作品の中に込められた深い意味を読み取ることができるようになるものです。幼い時期には、やさしい言葉と絵によつて、幼いなりに言葉や絵を楽しみますが、小学校の高学年や中学生になると、自分が経験したことや直面している問題に絵本の内容を重ね合わせて、「この絵本には、こんな深い意味が隠されていたんだ」などと感じて、新しい感動を味わうことがしばしばあります。

さらに大人になって、辛いことや悲しいことがあつたときに絵本を読むと、心が癒されたり、人生のだいじなことに気づかされたりするものです。最近、中学生からこの大賞へのおたよりが少なくなっているのはさびしいですが、今回は第七中学校から何人ものおたよりがあつて、うれしかったです。

川上さんからおたよりは、幼いころに読んだ一冊の絵本が自分の成長にどのような意味があつたのかということを書いたもので、絵本と子ども心の発達を考えるうえで、とても貴重な報告になっています。

その絵本は、『ゆきだるま』という文字のない、

一歳から三歳くらいの幼児向けの絵本だという。ブックスタートに向いている絵本の一つですね。部屋のかたづけをしていたら、たまたまこの絵本が出てきたというのです。いろいろな思い出が、この絵本には詰まっていたんですね。

私宛のおたよりは、その絵本の思い出を懐かしむだけでなく、その絵本が自分の心の発達にとっても大きな役割を果たしてくれたということ、具体的に書いています。

幼かったころの川上さんは、字を読んだり言葉を話したりするのが苦手で、絵本にもあまり興味を示さなかったそうです。ところが、お母さんがこの絵本を買ってきて見せてくれると、すっかり

お気に入りになって、自分で自由に言葉をつけて何度でも読むようになったばかりか、次々に文字のある絵本も読むようになり、わからない言葉があると、人に聞きに行ったりするようになったというのです。

こうして絵本『ゆきだるま』がきっかけで言葉の理解力、言葉を話す力がどんどん発達したことから、川上さんは、『ゆきだるま』は、「私の言葉の原点」ではないかと記し、次のようにおたよりを結んでいます。

「たった一冊の本が私の世界を広げてくれてやっぱり本ってすばらしい」

このように幼児期の自分の成長の歩みを、中学

生になったところに振り返って確認することは、自分自身に自信を持つうえでも、自分が人生のなかで辛いことにぶつかったときにぐらつかないためにも、とてもだいじな基盤となるものです。これからも、折々に幼児期や少女時代に自分がどのようにして辛さや悲しさや不得意なことを乗り越えたのかを振り返って、確認するということをするといいですよ。